

編集後記

- ◆再雇用をしないで定年退職した友人に久しぶりに会う機会がありました。彼が定年退職する前の7～8年間は、「官から民へ」「改革なくして成長なし」などのキャッチフレーズを多用した小泉構造改革の嵐が彼の職場に吹き荒れていました。その当時、うつむき加減に苦しそうに話をしていた彼とは違って、いまは農業に専念して自然と格闘していること、イノシシや外来種で小型のシカの仲間の「キョン」等の野生動物が房総半島で大繁殖しており、作物を食い荒らすのに悩まされている等の話を楽しそうに語っていました。
- ◆そんな彼の話を聞いて、船橋に住んでいた10数年前を思い出しました。自宅の外で作業をしていたら、周りの竹藪の中に私を見ている犬らしき動物がいました。よくみると、尻尾の太い狸でした。ある夜には、額から鼻にかけて白い線のあるハクビシンが眼を光らせて家の屋根の上にいるのを目撃したこともありました。人口減少と高齢化の進展によって耕作放棄地の増加や里山林の放置が原因で山里に野生動物が下りてきているというニュースは聞いたことがありますが、総武線の駅から徒歩10分足らずの街中にも進出してきているのか、と驚いたものでした。
- ◆今号の市長インタビューは2年ぶりの企画となりますが、長く暮らしてお世話になった船橋市を訪れることになりました。農業・漁業の若い後継者が船橋には非常に多いという話など、他の地域からすると羨ましがられるような、私の知らない船橋の話をたくさん聞くことができました。船橋はまだ人口が増していますが、将来的には人口減少が予測されています。ポテンシャルの高い船橋ですが、そのことに安住せず、中長期的な視点に立って着実に取り組みを進めていることがわかりました。
- ◆昨今は国や地方の政治を問わず、国民・市民のウケ狙いの政策や対応が巷にあふれています。選挙が近づくと、その傾向はますます強くなります。先を見通す力、おれずに行えるリーダーが必要だとよく言われますが、今回のインタビューでそのことを改めて考えさせられました。有能なリーダーを識別できる力を私たち一人一人が持つことが民主主義を維持する必須条件と思いました。

事務局長 佐藤 晴邦

自治研ちば 既刊案内



2017年10月
(vol.24)

- 巻頭言 銚子市長 越川 信一
- 自治研センター講演会 グローバル化する労働問題と働き方改革
早稲田大学 社会科学総合学院教授 篠田 徹
- 寄稿 千葉県の在宅看護 NPO の特性
地域包括ケアシステム構築に向けた看護資源の可能性
千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科講師 成 玉恵
- 市議会報告 安心して生活できる船橋へ 船橋市議会議員 三橋 三郎
- シリーズ「千葉から日本社会を考える」
千葉の「地域づくり」と地域包括ケアシステムという課題
——新たなコミュニティの再構築、人口減少、過疎化にそなえて
島根県立大学名誉教授 井上 定彦
- 公共の担い手 子ども食堂を通じて見えてきたこと
こがねはら子ども食堂代表 高橋 亮
- シリーズ千葉の地域紹介
長生村 夢がある、生きがいを感じる、住んでよかった長生村
長生村役場総務課 研究員 井原 慶一
- 新聞の切り抜き記事から 編集部
- 今期の入手資料
- 一般社団法人 千葉県地方自治研究センターの概要（会員募集）
- 編集後記 事務局長 佐藤 晴邦

バックナンバーの申し込みは当研究センターまで 1部800円

自治研ちば VOL.25

2018年2月21日発行

発行 一般社団法人

千葉県地方自治研究センター

〒260-0013 千葉市中央区中央4-13-10

千葉県教育会館新館6階

自治労千葉県本部内

TEL 043-225-0020

FAX 043-225-0021

編集 佐藤 晴邦

印刷 (株)メロウリンク企画

頒価 800円（送料別途）